

●発掘調査

1967年、平城宮東張出し部の南東隅に大きな庭園の遺跡が発見されました。この場所は『続日本紀』にみえる「東院」にあたることから、発見された庭園は「東院庭園」と名づけられました。それまで奈良時代の庭園については古い文献からそのようすをうかがうのみでしたが、この発見を契機に発掘調査を継続した結果、庭園部分とその周辺一帯の様相がほぼあきらかになりました。東院庭園は東西80m×南北100mの敷地の中央に複雑な形の汀線をもつ洲浜敷の池を設け、その周囲にはいくつもの建物を配していたことが確認されたのです。



▲池北岸の築山石組付近、後期の池の遺構（南西から）

*「築山」とは庭園内に山水の景をつくるために設けられた人工の山のこと、古くは「假山」ともいいました。石を積んで築いた「假山」の造営は、中国ではすでに後漢の時代にあったことが知られています。日本では、この遺構が最古のものです。



▲中央建物と平橋の遺構（東から）



▲池から出土した遺物 施釉瓦と宴遊に用いた木舟・土師器類

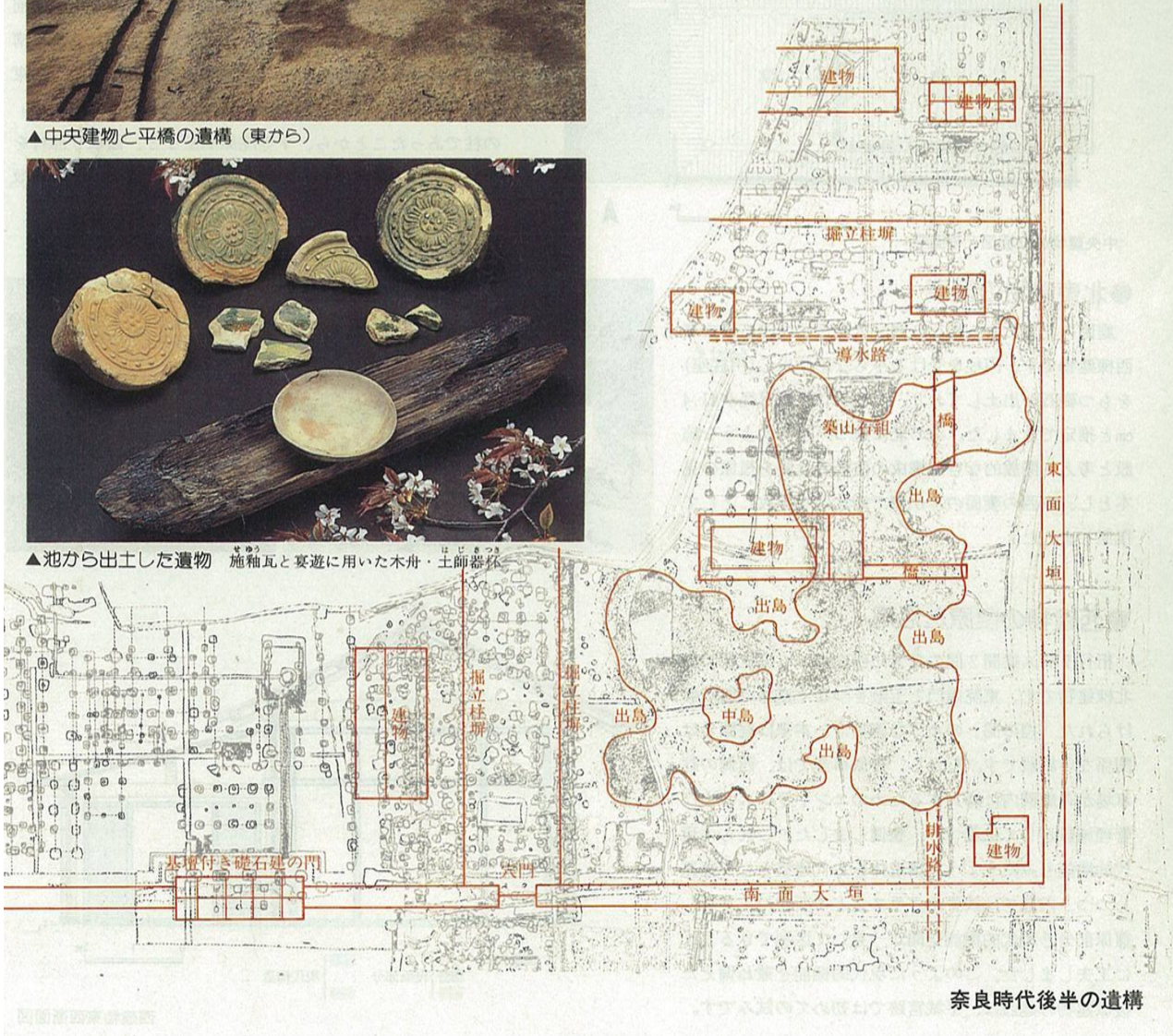


図 I-13 パンフレット「平城宮 東院庭園」-1